

2013 年度漢文夏期集中コース報告

大竹弘子

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、本年度、40週間の年間コースとは独立して3週間の漢文夏期集中コース（以下漢文コース）を設置し、2013年6月21日（金）より7月11日（木）まで実施した。

漢文は年間コースでも、プログラム後期において「選択C」（2012-13年度カリキュラム報告参照）として週1回100分の授業を実施している。しかし、年間プログラムに参加は出来ないが、研究上、漢文読解を必要としている大学院生が想定されることから、日本人が書いた漢文を中心に、漢文の基本構造・読解に集中したコースを設けたものである。

2 漢文コースの目的と特徴

このコースは、対象として、主に一次資料として漢文を読むことが必要な歴史系、文学系、宗教研究、美術史等の分野の大学院生を想定している。漢文読解の必要はあっても、漢文基礎の学習機会が少ないことから、基礎となる構文、旧漢字、漢文訓読体、候文などを集中的に学習し、その構造知識をもとに実際の文章を読み、和製漢文の文体・特徴に慣れ、以後の研究に資することを目的としている。

受講者には次の要件を満たすよう求めている。

1. 漢文読解能力を必要とする専門的または学術的分野への従事を目指していること
2. 上級レベルの日本語能力、および文語文法の知識を有すること
3. 日本語の基礎的文法・文型を十分に理解し、ひらがな、カタカナに加え、漢字約1000字以上の読み書きを既に習得していること

3 学生の構成

今年度は博士課程に在籍する三名の大学院生が受講した。それぞれ、近世史、近世科学史、仏教史を専門分野とし、研究において、漢文あるいは漢文調で書かれた一次資料の読解・理解を必要としている。研究対象、読むべき一次資料もある程度固まっており、漢文読解の経験もあった。

4 教育活動の詳細

4-1 授業・校外学習

毎日の時間割は、50分授業が4コマの構成で、うち2コマを午前10時00分から午前11時50分までの間に行い、昼休みを挟んで2コマを午後1時30分から3時20分に行なった。

午前の2コマは第一・第二週の間、漢文の構文構造を中心に、単純なものから複雑なものへの積み上げとともに多数の例文を自力で読み解いていく練習を重ねた。練習文はほとんどを白文の形で提示した。

午後はまとまった文章の読解が中心で、第一週目は近代の文章を取り上げ、漢文訓読体、旧漢字に慣れることを目指した。二週目は、『日本外史』『論語』などからまとまった内容のある短い文章を選び、返り点、送りがなを付けた形で、文脈のある文章の読解を行った。

第三週午前は主に候文を取り上げ、実際の文章の読解に取り組んだ。午後は学生それぞれの研究資料を取り上げて、一部分を選び、全員で読解を試みた。取り上げたのは、『儀衛生日記』、西川如見『天文論議』、伝源信『法華即身成仏要記』の三点である。最後の二日間は、午前午後とも、各自、教師からのアドバイスを受けながら自分の研究資料を読み進めた。

金曜日午後は校外学習として、鎌倉圓覚寺での座禅研修、国立劇場での歌舞伎鑑賞教室に参加した。

4-2 授業の実例

ここでは、より具体的なクラス活動について述べる。

午前の構造中心のクラスでは、まずその日の学習項目である構文を、典型的な例文を用いながら説明する。次に用意した短い例文（大体15から25文）を白文の形で提示する。学生は各自自分で例文を読み解いてみる。例文にはその日の学習項目だけでなく、既習の構文、漢字のやや例外的な読み・用法（標準的な漢字辞典には含まれているもの）、語彙・表現的な要素、慣用的な語法などを含めている。学生は白文を既習の構文構造をもとに解析し、辞書を引きながら意味を取っていく。分からない漢字、語彙、表現についてはもちろん辞書を引くのだが、自分が既に知っている漢字でも、現代語の読み・語彙・意味ではなく、いわゆる漢文訓読体で用いられる、読み・語彙・意味を適切に選ぶよう指導する。また、この過程で、辞書にどのような情報があるか、どんな種類の辞書、データベースがあるかなど、実際に資料を読み解く上で必要になるであろう「調べる手段」についても知識を得る。また、短い文ではあるが、文脈からの意味判断、文脈・話題の背景からの推測などを通じて、文の要素の意味関係を推測していくという練習にもなっている。

午後はよりまとまった量の文章を取り上げて読み、意味を取るという作業を行う。著者、

題名、歴史的背景などの情報を得てから実際に読み進めるが、まず、構文知識などを応用しながら、文章をまとまった意味の固まりに分節化していき、どの漢字が語彙としてのまとまりを構成しているかを判断する。次に辞書を引き、その中から適切な情報を選択する。そしてその情報を意味が取れるよう繋げていき、文脈にあった意味関係を作り解釈する。この過程の中の全ての段階で、学生同士の意見交換、また教師と学生間の意見交換が行われ、何を手がかりにし、どのように調べていけば妥当な解釈にたどり着けるかを模索する。このような作業を繰り返すことによって、実際の資料を読み進める時に必要な技能の習得を目指している。

5 おわりに

漢文コースは本年度初めての実施であったが、三名の学生の熱心な学習態度にも助けられ、充実した授業が行われた。もちろん、短期間なのでこれで十分な力が付いたとは言えず、これからも経験を積まなくてはならない。また、まとまった白文に取り組む時間が少なく、近世以前の文章に触れる時間も非常に限られていた。しかし、漢文という文章を読むための入り口となるものは提供できたのではと考えている。

(おおたけ ひろこ／2013年度漢文夏期集中コース主任)